



早稲田リサーチパーク地区における自然環境対策の推移

平成12年2月にとりまとめられた「本庄新都心地区環境検討委員会・提言」や、その後の検討委員会・学識委員ヒアリングでは、生物多様性対策の総合指標としてのオオタカの保護を図るために計画地内の様々な場所や環境へ対策を講じていくべきとされています。生態系の上位種としてのオオタカの安定的な生息や繁殖を維持するためには、餌となる動物類やそれを支える植生が豊かでなくてはなりません。

そうした背景から、主な自然環境対策の取組みとして①インキュベーション施設（研究棟）北側法面の樹林化対策②研究棟、コミュニケーションセンター屋上の緑化対策③南北新規道路の半地下覆土対策に向けた動植物相の現況把握の3点について、平成21年度より実態調査や対策の実施が開始されました。

①は、20年以上も前に造成され外来牧草等により草地として維持されてきた9,372㎡にもおよぶ長大な法面を、生物多様性に寄与する自然樹林地に育成するため、2008年3月に在来木本による植栽が行われました。高木・亜高木・低木・草本の階層構造を伴う自然樹林へと推移するよう、植生調査に基づく順応的管理が進められます。

②は、旧グラウンドへの建物の建設に伴い上空から可能な限り人工的な空間の認知を少なくするために、在来草本を主とした屋上緑化を進めることが提言されました。建設当初の段階では在来草本の緑化が困難な状況であったことから、簡便な緑化工法が試験的に実施されましたが、その現況を植生面から把握し改善方針に取組むことになりました。

③は、地区の南北をつなぐ新規幹線道路（幅員12m）について、東西方向の自然環境が分断されることから、検討委員会では生態的回廊（コリドー）でつなぐべきことが提言されました。その後の検討により、地形条件の点から可能となる65mについては、半地下構造で上部を覆土し自然樹林を再生して東西をつなぐ自然環境コリドーとすることが決定されました。そのため、道路上部に再生すべきふさわしい自然環境の内容を検討することが必要となります。現状の道路計画地内の動植物相の現況把握を行い、今後の道路計画の設計段階において反映させていく予定です。



●2013年5月2日 大久保山造成法面

◆改変地における緑化・植栽対策

「早稲田リサーチパーク地区」や「本庄早稲田駅周辺地区」では、建物の建設等に伴い自然環境が様々に改変されます。改変された敷地では、一定の割合で人為的に植物を植栽する緑化措置が講じられるため、その量と質に関して生物多様性の観点から、望ましい植栽計画の検討・実施について、重点的な取組みが進められています。

従来の緑化では、人から見た美観や速効性が重視され園芸外来植物が多く用いられていますが、当該エリアではオオタカを始め地域の生きものの生息・生育にふさわしい在来適正植物が選定され、建設用地や造成法面等で可能な限り植栽されています。

切土された尾根の斜面では、周辺樹林に馴染んだ自然再生が進み、建物敷地の一画でも花や実が意外と美しい在来植物による緑化が見られます。



●2018年6月8日 大久保山造成法面



●2020年11月13日 大久保山造成法面



●在来種マユミを用いた低木植栽地